



いま す せき が はら 今須宿 ~ 関ヶ原宿

約 3.9 km

歩き旅

中山道ぎふ17宿とは？

江戸時代に整備された五街道の一つである中山道は、江戸と京都を結ぶ重要な街道で、全長135里32丁(約534km)に69の宿場が置かれました。そのうちの17宿、126.5kmが岐阜県のみ濃地方を東西に横断しており、今も往時の面影を色濃く残しています。その土地の歴史や文化、隠れた魅力の発見を楽しむ街道観光は岐阜県の誇るべき観光資源であるとして、平成25年2月に「岐阜の宝もの」に認定されました。

今須宿

美濃路の西端である今須宿は妙應寺の門前町として賑わいました。今は山里の静かなまちとなっており、昔の街道の風情を感じることができます。

鶯の滝

水量が豊富でひんやりと涼しげな空気の中に、鶯の鳴くこの辺りは、難所であった今須峠を越える旅人たちの憩いの場所でした。古くは東山道の宿駅として、人や荷物で賑わったといわれています。

妙應寺

正平15年(1360)に、今須領主長江重景が母である妙應尼の菩提を弔うために峨山禅師(総持寺2世)を招いて開山したのが始まりとされる県下で最も古い曹洞宗寺院です。宝物館には、町の重要文化財の文書をはじめ、当地出身の喜田華堂筆の縁起絵巻などが展示されています。

不破の関跡

672年に勃発した壬申の乱では、この付近を境に東方の大海人皇子(天武天皇)と西方の大友皇子(弘文天皇)が対峙し合戦となりました。翌年、戦いに勝利した大海人皇子はここを要所として「不破の関」を置きます。東山道の美濃不破の関は、東海道の伊勢鈴鹿の関、北陸道の越前愛知の関とともに、古代律令制下の三関の一つとして重要視されました。平安時代以降には、多くの歌や紀行文に関跡の情景が描かれています。

壬申の乱

672年、天智天皇の弟の大海人皇子が、天智天皇の子である大友皇子を首長とする近江朝廷に対して起こした古代最大の内乱です。この辺りには、激戦の末、両軍の流血で黒々と染まったといわれる黒血川、敗れて自害した大友皇子の首が葬られた「自害峰の三本杉」などの史跡が残っています。

関ヶ原宿

関ヶ原は、伊吹山と鈴鹿山脈に挟まれた隘路であったことから、672年の壬申の乱、1600年には関ヶ原の合戦と2度に渡る天下分け目の合戦の舞台となりました。周辺には2つの合戦の史跡が点在しており、歴史散歩が楽しめます。